審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　　崔　ゴ ウ ン

本論文は、「韓国柱心包斗栱論―表現論理の解読―」と題されたもので、韓国において伝統建築に用いられたと斗栱のうち、柱心包という柱の上だけに斗栱を置く形式について、その新しい分類を提案し、あわせてその建築における意味を論じたものである。

論文は 2 部で構成されている。第一部では、韓国における中世の斗栱形式である柱心包を網羅的に取上げ、その形式分類を行い、表現論理を検討し、さらにそれからの逸脱現象を検討した。第二部では、第一部で導かれた論理をもとにして、韓国の柱心包斗栱と日本の和様に見られる斗栱と比較検討を行い、韓国と日本における斗栱の中世的な特質を解明する。

第一部では、第一章で、柱心包斗栱の精密な形式分類を行い、それを編年した。大斗の上にだけに斗栱が組まれるものを、最も古い祖形とみなし、挿肘木を使うものをその次とし、さらに従来翼工形式として別分類とみなされていたものを、柱心包の最も後の形式とみなした。第二章では、以上の分類のもつ意味を考察した。その結果以下のようなことが明らかとなった。斗栱形式から建築の年代が推定できる。まら、幾つか技術系統が推定でき、工匠の関連性も指摘できる。建築の格式が解読できる。さらに、斗栱を見る視点として、外部表現、内部表現の双方の意味を解読した。第三章では、以上ので明らかにされた、斗栱の規則が、時代が下がるとともに、その逸脱現象が起きることを解明した。視覚的に重要な部分に、意匠要素が集中することが明らかになった。

第二部では、第一章で、韓国と日本の寺院建築における斗栱を比較した。双方ともに、斗栱の室外側と室内側で表現を変えていて、それぞれ対応する空間に意味を与えていることが解明された。しかし、韓国では、内部向きにポアジという形式を持つことに特徴があり、日本ではそれを用いないなど、形式においては大きな違いがある。第二章では、中国からもたらされた新しい様式をどのように受容したのか、韓国と日本の場合を比較した。韓国においては、多包形式は最も上位の斗栱形式として受容されたが、柱心包はその形の影響を受けつつも、その表現形式を強く持ち続けた。日本においては、外部表現においては、影響を殆どうけず、中備が目立つ程度であったが、内部表現においては、内陣、外陣を隔てる部位においては、巧妙にそれを取り入れ、それぞれの空間区分を特徴付けることに大いに効果を上げていることが判った。両国ともに、新しい中国の斗栱形式を受け入れ

ながらも、伝統的な要素を強く残すという特徴をもつことが解明された。第三章では、韓国の斗栱の大きな特徴の一つである挿肘木について、中国、日本との比較から、韓国独自の特徴を持つことを明らかにした。

本論文は、形式分類がすでになされた斗栱、特に柱心包を研究対象として、その形式の意味を考察することにより、斗栱研究に新しい方法を与えた点に大きな特徴がある。また、確立した形式からの逸脱現象の意味を詳細に検討するという方法により、さらに正確に形式の持つ内容を明確にすることが出来た。韓国の斗栱の意味の検討を行うことにより、類似の現象を日本の斗栱にも捜索し、韓国と日本の斗栱のもつ特質についても、比較検討の可能性を探り、それぞれの特質を明らかにした。以上の内容は、従来の研究を大きく進めたものであり、さらに東アジア全体の斗栱研究、ひいては建築装飾における比較研究の可能性を提示したものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。